

〇〇してみました世界のフィールド

# 済州島と在日済州人の過去・現在・未来

ながた あつまさ  
永田 貴聖  
民博 機関研究員



在日済州人の絆について考えてきました  
在日済州人センター入口

済州島にある在日済州人センターは、島と在日済州人をつなぐ活動をしている。センターの一角にある「功德碑」の展示を観覧し、済州島と在日済州人の未来に思いを馳せた。

## 済州島を離れた人びと

現在、わたしは、日本と韓国においてフィリピン人移住者が集まる「空間」や教会の自助グループなどで調査をしている。関西を拠点にフィールドワークをしているとフィリピン人やブラジル人などニューカマー外国人移住者と積極的にかかわる在日コリアンによく出会う。そのなかには済州島がルーツであるという人たちがかなりいる。済州島から日本にやって来た人たちの多くは大阪に到着し、現在に至るまで大阪で暮らしている。そこで、今年二月に本館の海外研究動向調査で、済州島と在日済州人の過去・現在・未来をつなぐ役割をはたしている、済州大学校・在日済州人センターを訪れた。

## 済州島と在日済州人をつなぐ「功德碑」

二〇二二年に設立されたセンターでは、済州島出身の在日コリアンと済州島の過去から現在までのつながり、海外に移住したさまざまなコリアンルーツの人びとの動向に注目している。センターがある建物の屋上からは漢拏山が一望できる。この山は国立公園にも指定され、島の美しい自然環境を特徴づけている。それでは、一階のギャラリーに入ってみる。最初に目に入るのが、『君が代丸』の模写である。これは日本植民地時代に済州島から大阪まで就航し、多くの出稼ぎ労働者を乗せた定期船である。さらに奥へ進むと、戦後、人びとが日本（大阪）において生業としたホルモン焼店の模型、日本植民地支配期の渡



専任研究員金泰植氏（右側）が資料について説明

航証明など貴重な資料が公開されている。これまでの展示品は比較的身近なものである。しかし、なぜか、ギャラリーのさらに

## 過去から現在、そして未来へ向けて

朝鮮半島の最南端に位置する済州島は、朝鮮半島本土とは異なる独自の文化が継承されている。現在、島は観光地としても有名であるが、悲劇的な事件が起った暗い過去がある。日本敗戦後の一九四八年四月三日、反体制運動に参加したとされる多くの島民が殺害された。これが『済州四・三』である。殺害されたなかには運動に参加しなかった島民も多く含まれ、残った人びとの多くは弾圧を避けるため、日本に逃れた。

『済州四・三』のあと日本に渡った人びと、それ以前の日本植民地期に日本に渡った島民の大半が大阪に暮らし、戦後混乱期の貧困や、旧植民地出身者への差別や社会的排除などから、苦しい生活を強いられた。しかし、済州人同胞は団結し、互いの生活を支え合った。

センターでは、在日済州人と済州島をつなぐだけでなく、過去から現在、そして未来への地域的な関係の広がりを想定した研究活動が展開されている。二〇二三年、研究報告書『済州と沖縄』が刊行され、周辺島嶼部を含む東アジア地域の移動と交流についてが検討されている。

在日済州人センターは、在日済州人が島内出身地に寄付した証である「功德碑」の精神を受け継ぎ、済州島と在日済州人の過去・現在・未来、さらに、済州島と周辺地域のつながりを探る試みを展開している。

（掲載写真はすべて二〇二七年一月に撮影）



功德碑の模型



上：ギャラリーにある「君が代丸」の模写  
下：再現されたホルモン焼店

韓国、済州島

奥には、複数の碑のようなものがある。これらはいったい何なのか？ 今回の訪問でお世話になったセンターの専任研究員である金泰植さんが説明してくれた。在日済州人たちは島内にある出身の町村に寄付をおこない、町村はその返礼として、多くの「功德碑」を建立したということであった。これらの碑はその「功德碑」の模型だったのである。センターでは、済州特別自治道（済州島を含む行政区）の協力和資金援助のもと、碑の数、形態などに関する実態調査を続けている。「功德碑」は現在の在日済州人たちと済州島の絆が形となったものであると云ってよい。